

成人のAD/HDに関する神経心理学的検査による検討

白川 玲奈

〈目的〉

注意欠陥/多動性障害 (AD/HD) は、発達年齢にふさわしくない不注意と多動性と衝動性が中核症状であるため、作動記憶からなる実行機能障害があると仮定される。中核症状のうち、多動は男児に、不注意は女性に多い。成人AD/HDでは不注意は現存し、多動や衝動性は目立たない。またうつや怒りがみられる。さらに成人では本人による回顧的診断に頼らざるをえない場合がある。成人AD/HDの自記式質問紙として、Wender Utah Rating Scale (WURS) があり、日本版WURSも作成された。しかし主観が入る自記式質問紙による回顧的診断のみならず、AD/HDに対する客観的指標も必要である。客観的指標として、注意持続課題検査 (CPT) をはじめとする神経心理学的検査が用いられる。日本のAD/HD研究では、子どもを対象とした研究はあるが、一般成人AD/HDを対象としたものは、はじまったばかりである。そこで大学生・大学院生を対象とし、WURS得点が低いものと比較して、WURS得点が高いものは、①日本版Buss-Perry Aggression Questionnaire : BAQを用いて怒りが高いこと、②日本版WAIS-IIIにおける作動記憶群指数を用いて作動記憶が悪いこと、③Windows版Conners' CPT-II Version 5 (以下CPT-II)を用いて不注意があること、の3つを確かめることを主な目的とした。

〈方法〉

研究は北海道医療大学内で、質問紙と神経心理学的検査の2部構成で行なった。質問紙協力者は195名で、WURS平均得点-0.5SDより低得点をWURS得点低群 (以下低群)、WURS平均得点+0.5SDより高得点をWURS得点高群 (以下高群) とし、この2群を分析対象として性別や怒りの得点を比較した。神経心理学的検査では、低群・高群に該当し、

検査への同意を得られた人を分析対象として、作動記憶と不注意を比較した。

〈結果〉

①高群は低群に比べて、怒りの得点は総じて有意に高い。②高群と低群において、作動記憶に有意差はなく、作動記憶は悪くない。③高群は低群に比べて目標刺激に対する反応のみがより早い。ただし神経心理学的検査に、高群において参加者に比べて怒り得点が高いものは参加していない。

〈考察〉

一般大学生・大学院生においても、怒りは総じて高いことがわかった。また今回の低群と高群において、WAIS-IIIの作動記憶とCPT-IIは有意差が総じてないことから、作動記憶に関する神経心理学的検査としてWAIS-IIIは有効ではなく、同様に不注意に関してはCPT-IIは有効ではない可能性がある。

〈主な文献〉

松本俊彦・上條敦史・山口亜希子・岡田幸之・吉川和男(2004). 覚せい剤依存症成人患者における注意欠陥/多動性障害の既往 : Wender Utah Rating Scaleを用いた予備的研究 精神医学, 46, 1289-1297.